

中村俊定文庫  
文庫 18  
353



五月あす

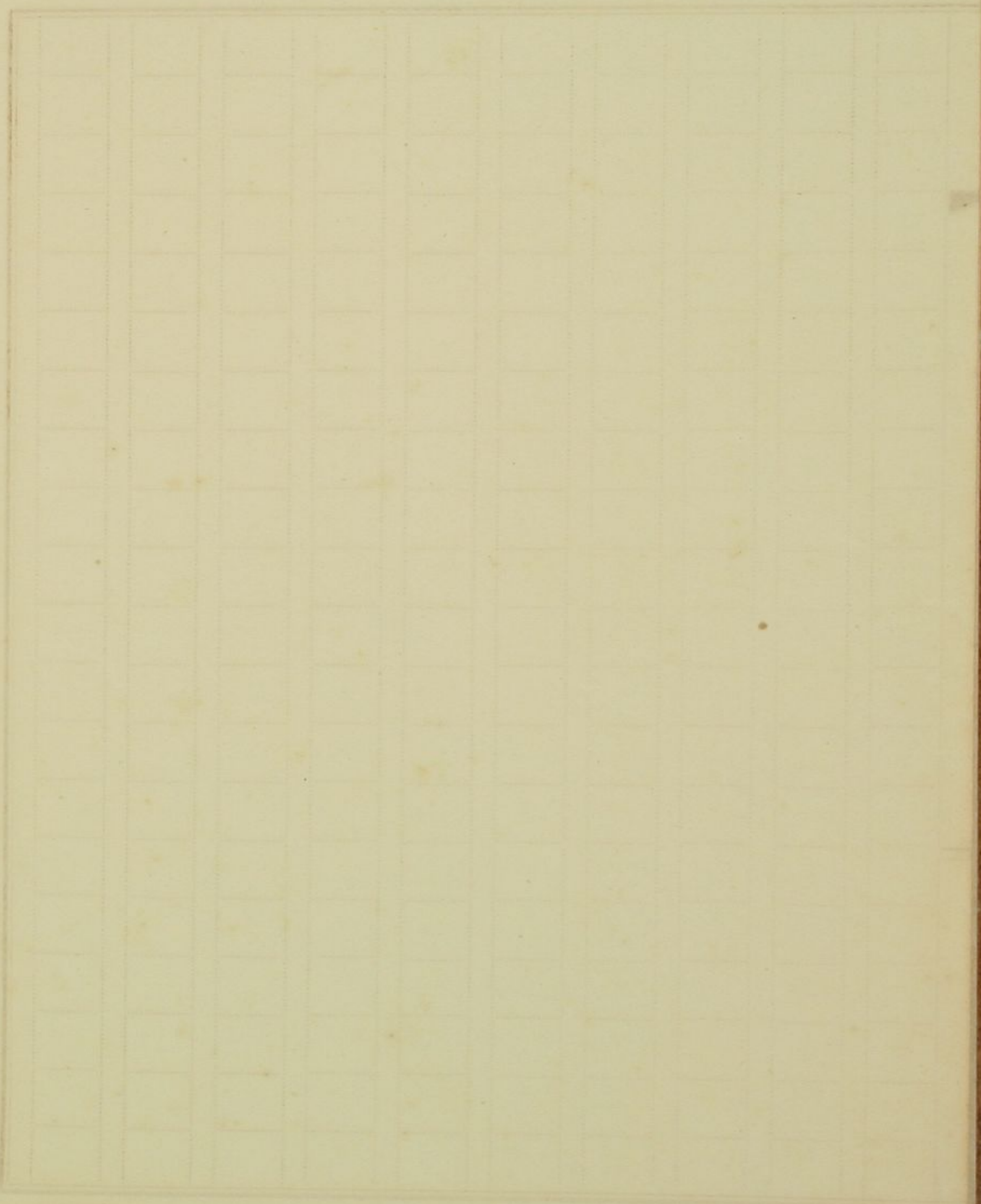
素丸若



青あらし

序

けころ南臺子のもとにて墨繪合といへる小冊  
 を見侍りしに雪中庵のものすきにて六玉川の  
 六歌仙なり蕉門の血脉絶へせず玉をつゝり  
 金を打のへて地畷の变化一卷の成就誠に江都  
 の俳傑といふ一し是れが序に言く俳に似  
 たるものは墨繪とこそけに一句の媚を移り  
 かさる時は打見に目をよろこばしむれと後



にはあかる、事不易には忘かし、此等に遊ん  
ご正風の咲ぬらんと、の大意また全言なり、し  
かれと、は集のうちに一句の新りにまよひて  
附かざるあり、又媚にほれ、聞えざるあり、  
増て三四句の運ひ変化等うるさき事粗見あた  
りぬれは、は序の全言もまことしからず、  
け等り句やまた、は後の人に飽れず、されん  
と徒然のル上につら、評して、独修行の坂の  
息杖にも、と心るか、ふま、を書て、見ること、に存  
りぬ、人のう、は言よく、戒う、は之、之ぬ、もの

から又あまたの聞ちが、ひ評した、か、ひ、あ、ら  
ん、それ、よ、し、時、世、粧、の、笑、に、し、て、序、文、の、趣、意  
と、俳、風、と、の、透、ひ、た、ら、ん、と、同、し、罪、受、へ、き、事、也  
けり

宝曆九己卯年卯月初日

其日庵素丸書

墨繪合第一の歌仙の内

木賃は木賃ともおもふなり

あれく〜て曇の〜の枝蛙

け附句むつかしく案して一通りにては聞とり  
かたき人もあつし、附心は木賃の他一さほ  
そ水とも思へとかゝる荒たの家も取当りた  
る事かなと二句の間の心は解した水とも曇の  
うへの枝蛙と移りたるにて一句同へす。荒屋  
の内へも雨蛙の飛入て曇の〜くに咽をふくら

し居たる様にやと覚ゆ、是等も後にあかれや

せん増て青蛙雨蛙の名は古抄にもあれと枝蛙

といへる名は管見いまと忘るや定めて雨蛙

の新名とも是ゆ詞は古きを用ひてこゝろは

あたらししあれとは風雅にたつさいるほとの人

ほしれりなり不局に申さほ

あれく〜て曇へも來る雨蛙

とあれは早く荒家の躰も見之句も聞へて思童

も合矣す〜きを面白くあれねは移りて却て精

神の妙毫を没し侍りぬ其次の句

あれしと墨のくくの杖蛙

織と見るとに下糸の麦

け句附たるやうにてたしかにつかぬ也 芝打

越しの旅船の他敷に荒家と其場を附又下糸と

其場もあし、麦に蛙の時節取合たれとも織

とめ程といふ詞一句の媚新りにして更に前句

につかす一句の理屈ありかゝる句はいまの江

戸の投込句にて季節のほとらいに投込む事

とかやては三句目は折こしに他一き旅船あ

りて直に荒家を附たれは淋しき事は増え場の

臭のあふ白紙をて不変化といふへし 附方の

八條はは紙の入用にしてひとつくに附合ん

も事長けはは是略して爰は時分にて附一き也

心趣は山の古寺と包て

あれしと墨へも來る雨蛙

山をめぐりて鐘は暮ゆく

け外いかほとも附かたも案しかたもあつし

うの花や解て下り 河の音

けお句印の花の香解といふ心あふめと心余り

之詞是るや俗にぬき句といふもの程 例の置

錯の道折といふ一解趣向殊更古し不  
易くに編辟しるる存ん 上古の不易、中  
古の不易 今の不易とある一詩にや け堯句  
の脇に

夕日こかる、里の夢 秋

さては脇当季に叶ハす句論即の花くたしの雨  
水たはは五月にもか、りぬ一けれとち中説に  
も其外諸説にも四月中吹比るの花腐降るとの也  
と見之たり さは麦秋は押出して巴陵五月  
秋と北作りとるこ 木句はるの花くたしの降

つゝきたる川水の勢ひ早く打曇りたる跡と  
見ゆれ夕日のこかる、は俄暑の比にて端午の  
前後なる一詩か

るの花や解て 下り 川の音

麦の穂す急に晴るひと里

ともしあは季節したしかに其比の空合まで増  
て雨後の風景と言ひ里は播国の玉川に専らよ  
むをやはたしかにけ句の脇とち言へしやさて  
予三万四の句に

打倦た双六盤に肘かけて

何かいさす 酔醒ぬるよいさ

は四句目一醉句の心解せずいかなるこゝろに

やあるらん考るに酔ぬまにいさ歸らんといふ

かさなけ小は上の何かいさす聞へす、是

は一寸と例へ出したる蓋茶碗物まで何かいし

らねと酔ぬるうにいさ食へすと言心とた

しかに是中 以て回つたる句讀なり在りこゝ

ろ存らぬ

何かいさす色くか出る

よしも句作す一し、同光記に暮の夕三に猪口

の春に玉くか出るとも握て置しあを打中

は四句めうなる今少しあるへさか

打倦たすこ盃に肘のけて

何かいさす 老いお淡

とあは双ふれ倦ていさわさく水のうかぬあ

ささの相淡を裸ひと之は茶坊主の娘の聞居た

るさままでえやうそりし。す木ばその次の句

に脱つ着つしく水に近き月の雲といふにも出

支度の形容の通句よて自然の正道の風流有て

人作の及ひかたき風情と云へし、又裏後りの



句に

きめたの中に城もそひへる

初鮭に今と一も死す中意を得て

け句一向つめ句之 殊に一句の解即着さか

りの時分聞し句にて當時言出すべき句にあふ

す二十三四年もあとの流行之 夫とても結く

附合せりあたふしけしは増るへきにうら

符は殊更に一巻の蝶つかひにて結かうに

も結附へき所なるに古句をけめて間に合せた

るはいかいなるん 前句を城下とのみ足て、

初鮭と斗句作りて響き奇りし馴染もなし、是

等斗牛帳の部にやあらんかし、以前句に附な

は

きぬとの中に城もそひへる

鮭くわるほとに息子も痘馴染て

と附るは息子はお小なる城内の何某の許に養

子となりて今福はあやしみて折くの便に鮭を

も送りたる繁花の城下の礎を叩て産のあやの

自慢したる本の一し、是等は執中の怯にして

口にはいへとも心よぬ終しかなき大印の趣向

立ち。又。

振かへる後ろ月夜の腰よ鎌

親子 三人 三所の秋

かけて待道頓堀の箱をこ

け三句の運び能のかれたる様にそくと考

に其嗅氣一々に句ひ渡るは一氣の變化なき故

こ其訣は打越しの箱箱男を動かして貧窮な

る者と足定め其次郎三郎は奉公に出して木や

子離れなると従一き親想なると三句目は其

子はたしかに治郎藝子に年切ると替けて道頓

堀との趣向は粉骨なる變化なきがけを待

といふ詞句論をここの枕詞にははらけ置た

れども打越しより續たる人情にみちみち五七

し免角人情を念いて三句へその志わたり

是等や詞の費りと兼相と云へきか趣向は道

頓堀を立て句作は如何ほしもあるべし

木や子 三人 三所の秋

嶋原も道頓堀も同じ雨

とせんにけ雨と言は父子離散の親想に暮りあ

了景物にして嶋原と道頓堀と二下をとりも三

所といふ一き響きとは言一 さらはひとり  
は娘にて禿奉公ひとり陰馬奉公の三男と七  
老カ かくて一句は一句にて雨の洒一き日の  
事なほ人情の紛ハ一き事となく一句は遊女  
町の雨のつゆ一と足る一

第三の歌仙の内

管器やニひろ三ひろ 晒布  
は花句ハ感する所となく句論徒言の句なり  
お句の例に至る事 さらし布を踏と足立たす

猶百年の格式跡已 不易く一と 乙古き趣向に  
乙古句を作りたる不易と心得たうハ下駄と焼  
味等のくく一とのならん

白雪やさうに下り来て晒し布

とせんか白雪と又古き取合せ古き一をうきと  
布と成たかを感戯のあ句ならん 増て古き  
ら古細布さうく一にの詞を裁てさうしの姿を  
更にの詞の働を七足る一

乗物一何をと褒美うかひひて

手燭に軒の風わたる香

分入は乞 権の月 権の月

此五句の月 附さる句 乗物に寝美伺ふに  
午燭の風をあしうひ 存はは 人情とての場と  
二句に籠りて五句め 匠路に月の難所といふ  
し、作者の外へは附たてし 取し直さす場の  
句にて増え分入れはと云詞の 梁人の若船にし  
て外のものには中すたぬ 詞已し 妙は人情  
と打越しへ返りてと云へし 権の月 権の月と  
りふ所は山寺の境内 死が山家の九折をいぬ 午  
燭よりハ明松にこそ取合へられ、川渡りと言

景色をたくり附て 権の月と云れども 午燭の  
影に分入せはと云詞 不累合又 詞の面白くは  
、あるを移りて墨絵を忘れやん か是は附んに  
は其時節にしと取合せもやハ二十年の功を積  
し

午燭に軒の風わたるなり

さいかにの 下る七日の月の露  
す小は根元の午燭に心を動して 趣向は七夕の  
まつりに庭上の備へてのよこをて 欠るハ  
束へさ育るりの 影をとく たりしにもしありねと 軒

の半端といへるも待人の感景もたれはよ、は  
詞の如所存日一 表方中は悪を禁じて是悪  
の句にありず。附かたは時節の會釈と言へし  
了すば見聞の格有て夏玉集の一解方れば夏  
の变化は見る事を附たる百練の腸と子一  
又

花の日も品水て月のひめ山

しく水來るかとき春のよの雨

出代に起清の嘘のものとかめ

引みぬ油の匣にふころひ

風そよよ 睡危車の下すたれ  
是け五句の續き人情四句ありて不変化外一出  
代の句何所一附たるか時雨くるかと言詞を聞  
とかめこそつと一吹雪かへり來る雨の寒さを  
物とかめかた女の情を附出したるにやと是ゆ  
されと起清の嘘は拙女のうへにて地の女の  
起情は誠の事なる一 又うそもあつとせめ  
物とかめといふ詞前句一つなきも寄と響きも  
なし、

狐ひとこ忍春のよのあめ

そのと涙くる春の夜の雨

なと、あらば詞の響きにて物とあめの崇あを  
趣向は分明なるも 打越しめさるる月に近遊  
ひ暮したる句存れは是も人情たしかに衣を  
呂十十たる者といふ類にはあらず しめれば  
出代りまた不自在にや引かれぬ、袖の垣に縫  
ひるは句論の句にてものとかめの講釈たしめ  
それには随宛車の人情一巻の地畷にあらず集は  
い浩と見えず地にはあらずたし其庵の案匠  
の斧は朽けんかしとあもハ遊侍りぬ。又

喰ふて寝よとの五人扶持也

菘かちに根岸とすくと嵯峨の奥

さしそこないの雀むらかり

踏はつすまては妾の高あかり

衆人の根岸の附合其場にして一句の古之集俳  
詔にあらず是は見る人にまかせて捨ぬ、さて  
妾の句何とぞ附かず考るに上足ぬ贅の高あか  
りより割出して雀を口さかなす妙中伝存とに  
たとへて附たるか 例のいりほかの附こゝろ  
ならん、又男の酔狂に稿竿かつき歩行たるを

妾は縁にねえへりなみりて笑ひ居りたるに  
まにや、志からぬ句作りやう有べき也。

さしそこないのすゝめ群が了

ほろ酔のきせりに殿を廻し居て

とありば妾と名のらすとち奢めかけの容態ハ

あさうめ成へし増へすゝめの飛ちかふそこ

にちあそこにもなと、煙管のえの戯小ながら

も恋の奴とも思ひとらしゝ寝妃か笑ひを得ん

との之執したるは其場其日其の時の人

情にしゝ俳諧はすへて今日の聞へぬ句にては

いつれの耳で諷諫せん

小荷然も激しくに足ゆり川霧

龍にこちう向するはかりこと

け謀といふ詞人の耳を驚かすはかりことにし

て前句の用にあらず寺もあつ移りにて海

よあかすゝものならん

龍にこちうむねする石磔

とありは川邊の即時の機軸にして御浴ハ何や

く坊眼を専とすへし

第四歌仙の内

草鞋とかなすあ特是盤

盆よりこいつもなみのふくろ物

け附合つらく思ふに全く後ろ附といふし  
季に四序あり物に次あり詞に前後あり姿  
に向背ありそ中をひこつに合せんとする  
了に七あり相と平生の所為に遠あぶさるは身  
然有り盆ありて袋との差出すは深草の乳母  
かこ、片とのみやけ物有り。は次にこを草鞋  
しとめすあ特是盤とこを附へき也。さ小は

俯仰の姿と言ひ前後の姿といひ詞のすかた

にあどハ述てさあとするめたの詞ハ亭主かた  
の人とこそ足ゆれあくは人の句には明らか  
た小と、又句にむかふ時は亦しけ速いにある  
んか。

法華坊主の青き刺立

駕傍のあたり遠ふた吹矢筒

け句一向解せり 駕傍のおしひの外に高く  
て合点せぬを祈らぬの遠さる吹矢筒のゆるな  
りと言事然し思ハ了さハ一句の理屈責に



と蕉門下には堅く誠むべきを又此次の附句に

いさと夷の膳をとりまく

け句全く夷講の膳にて神祕打越しと夷漢

のさしきの中より青きそり立あまはめにと

まるべきを乞落しけんしにわし指合にてか

くの如くさては附心一向つあり側の人の言吹

矢百の句は考訂に坊主の駕籠にとのけ置た

を足面白き吹矢のめりくりに皆吹きあし

駕にせ乗らさりけりといふこゝろにせあらん

と然り一句はさし解すくして夷の膳なをな

を附あり

第五勅仙の内

狂言のやうな且那の悪ころと

悟氣の釘の棹掛にきて

け句全く江戸の真取の句にて正風祿のすき

句にあらず、是を梳行と言は蕉門の減したる

一附句は様／＼あるし

第六勅仙の内

醫者も市前に東風の芥:

馬糞とはないが〜と傀儡師

以句附こ、ろ解かたし 考るに大名の若殿の  
まゝ召れて其結構なるに驚きもいや狐のたふ  
うかくなるらんかと思ふより大奉書書に包みた  
る饅頭も馬糞にてやあるらんといふ心にや  
さて〜持て廻りたる附こ、ろに〜是等は  
彼峠を行過てくら周にまよふの譬なる一。  
かく置錯に以て廻り附んにはいかなる難句な  
りとも附めと去事はあるましけふと夫は附と

いふものにあらず 返く〜心の行過を顧て三

年一度死は獲へて水酌して門弟衆へも折く

申事こ

ひたるい <sup>つ</sup>がれこ <sup>や</sup>が吐 <sup>?</sup>も <sup>つ</sup>まつ <sup>く</sup>傀儡師

〜しあは臆したる心の色をも障子の穴の目

にも笑らん さふは又心の一轉ありて大名の前

に下賤の臆したるよりは臆せぬかたを附ん

又変化と言へけふと

醫者も市前に東風の芥:

あもふさまや〜のけたる 傀儡師

打返

是等は一気の轉ずるより臆するの苦も無く  
驚たういやも無く差合の文句まで高く  
とけり上たると其意もおかしき増す一け  
ん 去来が十四躰に打返しと云附かたし一氣  
の一轉にして蓮門に秘事の習ひ事といふ一  
の 因は傀儡師の打越しは釣舟の眺望文句の句  
にて心を遊ばしあとの所は直照といふ一  
げ 次の句に

馬善くはないか〜と傀儡師

また白壁はし〜ぬ新田

是は何の事や傀儡師の通ふ新田の道筋の事  
に也 新田の白壁を〜ぬと云はぬ何んや  
江戸風の句の理屈詰にして傀儡にて下駄と云  
き味もよりま〜と附ぬ句といふ一〜 又白壁  
のゆはつ打越しの大意によろし  
ひたるいか喉もつま〜く傀儡師  
やあ降〜ふ 雪も 年度  
と申言を交へて全く天相の道句ありて腕の減  
了時合をし足る〜 糸慶とぬ傀儡の訊ひし  
のにして新田の如き耳とつて是の事にはあ

うずけ外附かたハ祓をもつて附合へきぢた  
ルことしけ下は略しぬ

おとふさまやつて 9け左の傀侶師

一雨晴て日也 日高州

如比前句に依て附句いとの様は七附るゝと  
の又 日高川の道成寺の訊いも9に―と傀侶  
をあしうぬあまゝ其らの打而のけしきなるを  
思ふさまと云詞の勢ひによりて晴て日高の詠  
踏のけしきと世年の切ちりろハあさき  
小のびたさいの五もしほえめり後の句は七文

字にけしきや二ふは其日の模様にして集には  
はしやせ左の方を取べき己

船底の片破橋を打渡し

淋しい時は茶印扱す

借取の風呂敷といてかゝこま

誠にまは鐘たけけ己

晴るゝ日の雲をす下に入かゝり

け五句の運び船底の板を橋に掛たを茶人の

他と附てよりこのかた東や七鐘七雨晴の又り

も一ツ心の拓一さ存れめたと一茶人と茶をこ

時分と時分との替りなや、  
出の一時の淋し  
さに辭するや、  
皆五句あり、  
二寂しみに落し  
不変化を<sup>不</sup>手<sup>手</sup>集主の  
不堪に、  
一人に般す  
増え鐘と  
入口と時分の  
二句と、  
まことさす  
この事なし  
暗る、  
日は天想と思ふ  
らめと入か  
い、  
といは全く  
夕日の時分に  
極  
了。

淋しい時は茶臼換かす、  
笑はせに末ておかし  
かる終る  
誠には筆の  
垢さ

流舟はまた荷上せぬ雨亭

なまもいも夏化ハいか  
程もある一け之、  
一けぬ、  
皆初より結といふに  
けあ、  
す附<sup>か</sup>めを附け  
三句  
の運心を轉い  
理屈をぬき  
媚を去り  
入ほかを捨  
たし、  
二序の大意に叶ハ  
せ成を專くと  
思ひ果の  
侍りぬ  
け外も又  
難す、  
まは  
植た午の白く  
働く  
餘の音  
大入ほか  
己田を植た  
時ほ  
泥に汚水  
二里か  
し午七  
けふは  
餘搗と  
こ白くは  
たらく  
とは午の  
色の利屈  
講叙にし  
いづくに  
風雅の  
優所  
有也

しるす 其外 枝蛙の新詞 船底の片破 稿 意  
の字の下手念 過たる 孫の 浮葉の 耳露 一ふくと  
云 不午 除 用 帳 け 我 等 かの 爲 の 紀 世 言 方 と 一 方 古  
き 三 十 年 以 前 馬 光 句 也 ち い さ い 額 に 諸 孫 成  
然 と 云 江 戸 の 風 舉 る に い と ま あり す け ち 教  
仙 は 一 つ 吹 の 撰 子 や あり ます 雪 中 庵 若 さ あり  
の 血 氣 に 江 戸 の 俳 友 を ぞ 一 の け 一 て 七 の 一 た  
了 に や と 是 中 十 年 七 以 前 の 風 俗 存 在 一 し  
当 時 中 一 か 一 日 不 午 除 を な す へ き 宗 匠 に あり  
る 中 一 一 夜 走 と い ふ 名 の 改 め の す り も

の 今 と 一 去 日 か た よ り 得 存 在 は 此 教 仙 の 人 教  
に し て 近 年 の 撰 子 思 は 可 し さ 一 庵 生 が 五  
十 年 の 流 行 と 誠 に 夢 の あ と な 才 に 匹 一 け 一  
へ け け 一  
兼 堂 問 云 我 聞 蕉 門 の 附 合 は 門 前 の 老 僧 も 馬  
打 思 童 も 耳 に 早 く 入 て 合 点 し 感 ず る を 俳 侶 と  
云 と や け 集 の 附 合 と 一 句 の 作 り 等 当 時 の 流  
行 だ ら ぬ と かく する 事 一 あり や 答 俳 侶 は 浅  
き 砂 川 を 行 か ぬ せ よ と 翁 の 教 訓 あり 一 句

く、に漢教亦義を付て去るのにはあらず誰  
か耳より早く聞へばやく感して切明かたを人  
初め俳諧といふあり、二句の字をむつあし  
くありく、持て廻つて舊句を立其上を又詞を  
新し媚態を儲て乍作る故智者といへども閑取か  
たし、爰を詩人は鄙態と云へり佛者は執心と  
笑ふわろはる、はみふ我が笑ハれとありて天  
の事、又、をハ何故とが、行を言へば例の  
心の行過て峠に逢ふ故に是本の室を止はす  
是れ古し彼れ古しと塩析す小は廻板に並へし

物を見小とし之す喰へし其味をしる可理  
居神理の取合をり之専らと工夫の智恵の横に  
曲りて終には入行かるとわちみやくと笑ハ  
るしハ眼前に逢へし三年に一夜五年に一夜  
つ、峠を下つて初念の下午に逢ふ一、不易  
と旅行も句の躰にある、一、双論あり是を附合  
にせんにあかす、事となく古き事はす、一、あ  
らし、爰は祖翁の強し置書給へる三念の内に  
して四十二年の末頭員費と今此送信に預玉へ  
まじ

又問六歌仙の終りの巻方跡の玉川に雅の句  
身 是尋し くらし 小下すや 卷時に臨んて  
ある一 しまるもろけんは原にぬる有り  
翁の杖突坂と悪の山と其日其所の即景にして  
我もしるりに念句に備了場有 是は平生の位  
心よりあり つか馬跡備の事有り 爰に大切  
の事あり 雅の句は忘めて求るもくははかな  
うろ平句に切字入たり 給わしうに成る念句に  
たふす 是我執より出た故後句の位と祢と婆  
と凡情と備了す之 或人四とせ五とせ七と前

なうん 鎌倉の吟行に武相の境地花堂にて  
ふしたにかめさかみにたりぬ誰かやと  
とせし誠に我國をばるくくと難し他の女にな  
ると同けぬ心細くは誰とく有り一 了か  
かに誰か身の詠路のはしり儲けりしと余情を  
感すへし 是尋はそつ日そつ時にあて無心所  
着より出たはをうつかう平句なふて慥に近  
世の雅の念句又と祢す人し 右の高野の句は  
まさしく平句に切字の入て忘めて我も郵けた  
小はありし されとかいす事はは不堪の素人



の及ひかたき所にしと宗匠のゆるしあは定  
めて苦しめましくや又いかしうす

跋

雪中庵前に雪飛を編して江戸二十奇仙を碎く  
我師のいらく是稿をもつて蝇をすすにひ  
としさゝるゝものを得て何の牛柄にのせむや  
と今と一玉川の亭仙ふ養を入て評論漫録た  
るさほ幸ひを同派よいとむにあはす其道  
の意へを歎けりと鐘五郎卒に  
任牙琴と刻信

去死て謙信軍をやむの氣精にひと一かよし  
としかゝのこ

己卯強そのお

巨勢周草堂書。



|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

MARUZEN I

